

グラビア1

おばあちゃんを 地域づくりに巻き込む

岐阜・美濃加茂市
ふれあい風土舎／中山道若衆会





今年で八十五歳になる山口花代さんは、自宅から二十分ほどかけて手押し車を押して「ふれあい風土舎」にやってくる。手押し車の物入れやラックには、きのう畑で採ったばかりのジャガイモやニンジンなどが入っている。七十八歳になる小木曾美枝子さんは、自転車に乗って風土舎にやってくる。荷台にはやはりネギなどの野菜や花が積まれている。二人とも、来る途中でお寺へのお参りはかかさない。

木曾川沿いにある岐阜県美濃加茂市の太田宿のふれあい風土舎では、月曜日を除く毎日、朝市が開かれている。野菜を提供するのは、近くに住んでいる五、六人のおばあちゃんたち。近在の人たちが徒歩や自動車で、野菜や花を買い求めに来て、五十円、百円と値のつけられたお金を置いていく。

ふれあい風土舎には「駄菓子屋ふんど」も併設されている。ここは、農家ではないおばあちゃんたちが輪番制で詰めている。お菓子の販売にはじまり、風土舎の向かいにある地域の著名人や太田宿を紹介した資料館「小松屋」の清掃、そして、合間合間に地域のうわさばなしに花を咲かせている。ここに集うおばあちゃんたちはおよそ二十人、平均年齢は八十五歳、最高齢は九十五歳という。

この太田宿のおばあちゃんたちの動きには、仕掛人がある。中山道若衆会である。



若衆会は、「中山道の宿場町として、かつて栄えた太田宿の復活」をめざしたグループ。中山道沿いの商店などの後継者を中心に昭和五十七年に結成された。同会が中心になって最初に取り組んだ活動は常夜灯の設置。台風で木曾川がはん濫し、この地区は大きな被害を受けた。さびしくなったこの太田宿を少しでも明るくしようと、木製の常夜灯を街道の両側におよそ七十基設置した。二十年を経た現在、古色をおびたこの常夜灯は、むしろ趣をかもし出し、かつての太田宿を偲ぶよすがとなっている。その後、現在は「おん祭MINOKAMO」として、美濃加茂市の行事として定着している祭りの開催などあわせて、昭和六十二年には、中山道宿場会議の開催を企画する。当時二十代、三十代だった若衆会のメンバーは酒の席で盛りあがった。「中山道宿場サミットをやるう」と。翌日から、中山道六十九次の宿場町、市町村数でいえば五十四市町村の商工会議所や商工会などをすべてを手弁当で訪れ、宿場サミットの開催を訴えた。翌年、太田宿で第一回が開催されたのを皮切りに、二回目は長野県軽井沢町、十七回目となる今年は埼玉県の桶川市といった具合に、「中山道宿場会議」としてすつかり定着している。

しかし、若衆会四代目会長の亀谷（かめがい）修司さんは、「イベントや祭りの開催は、あく



■連絡先 ふれあい風土舎 岐阜県美濃加茂市中山道太田宿4-2-9 亀谷修司 電話 0574-25-2328

までまちが元気になるための手段、目標は太田宿の復活」と言うように、つぎに打ち出したのが「農商連合」。農家と一緒に野菜的朝市などを実施した。しかし、若衆会も農家の人たちも仕事を持ち、お互い忙しい身。そこで、ひらめいたのがおばあちゃんたちの活用。亀谷さんたちは「普段は遊んでいるおばあちゃんたちを『こき使わぬ一手はない』と、朝市の運営をおばあちゃんたちにまかせた。おばあちゃんたちも、乗り気になり参加するようになった。朝市は平成二年から、駄菓子屋ふーどは平成六年から、それぞれ立ちあがった。「ふれあい風土舎」の名称は、地域づくりの実践を呼びかけ、風土舎を主宰している玉井袈裟男さんの考え方に共鳴して名づけた。ふれあい風土舎には、素泊まりできる部屋もあり、学生などが宿泊することもあるという。亀谷さんたちは、将来これを拡大し、「太田宿のゲストハウス」にしたいとも考えている。その際の接待役はもちろんおばあちゃんたち。

現在、六十代の第一線をリタイアした人たち、いわば前期高齢者の社会参加は各地で活発に進められている。日本の平均寿命は女性が、八四・九三歳、男性が七八・〇七歳、どちらも世界一。人生の最後の最後まで、地域に引っ張り出し、何らかの役割を持たせようとするふれあい風土舎の活動は、示唆をあたえている。